

アイルランド人になりそこなったイエイツ

吉 田 文 美

Why W. B. Yeats Failed To Be an Irish

Ayami YOSHIDA

Abstract

W. B. Yeats is generally known as a writer who worked very hard to achieve the Irish Literary Revival. However, many people in Ireland have never regarded him as “Irish”. From their viewpoint, Yeats is not always representative of the Irish literature. To understand their indifference toward him, we should recognize that Yeats’s family belongs to “the New English”—the Anglo-Irish who came from England to Ireland after England conquered Ireland in the 17th century. By blood, his family is not related to the Gaelic-Irish. In addition, his family were Protestants, members of the Church of Ireland, an offshoot of the Church of England. Yeats’s Protestant background placed him in the minority in an overwhelmingly Catholic Irish population. In terms of race and religion, Yeats cannot be a representative of Irish people. However, Yeats himself always regarded Ireland as his mother country. Many of his ancestors either hated English people or showed some sympathy for the plight of the Irish Catholics. With his emotional and intellectual attachment to Ireland, Yeats seems to satisfy Thomas Davis’s notion of Irish nationality. Davis was a chief ideologue of the Young Ireland movement in 19th century; he preached that one who loves Ireland and works for Ireland can be an Irish even if one is not a Catholic or a Gaelic. Under the influence of John O’Leary, a sympathizer of Davis, Yeats came to have a commitment to produce first-rate literature for Ireland. However, he became disillusioned toward the Irish Catholic nationalist cause around the turn of the century, returning to an emphasis on the Anglo-Irish Protestant tradition in his writings. By emphasizing the superiority of the Anglo-Irish Protestant

tradition, much of his works is the manifestation of the Anglo-Irish Protestant minority, removed from the culture of the Gaelic, Catholic, majority.

(1) 序

詩人W・B・イエイツ (William Butler Yeats, 1865-1939) は、一般にはアイルランド文芸復興に尽くした人物として広く知られている。しかしながら、アイルランドには、イエイツのことを特にアイルランド的だとは思わないと口にする人々が数多く存在する。もちろん、その人々もイエイツのアイルランド文芸復興における業績をよく知っており、彼が作品の中でアイルランドの風土や政治、社会、伝説などを取り上げていることは承知している。しかし、我々アイルランドの外に住む者の目から見ると文句なくアイルランド的であると思われる彼の作品には、アイルランドの人々からすると、必ずしも彼らの国の文化や、アイルランド人の心情を代弁しているとは思えない部分があるようである。アイルランド文芸復興につくした作家が、なぜアイルランドの人々から、そのように突き放した見方をされるのか、その点について考察してみたい。

(2) 「アイルランドの民族」の概念

イエイツが、アイルランドの人々に必ずしも親近感を持たれていない理由を考える際には、アイルランドにおけるアングロ・アイリッシュと呼ばれる人々と、ゲーリック・アイリッシュとよばれる人々との関係、そしてプロテスタント信徒とカソリック教徒との関係を把握しておかねばならないだろう。

まず、アングロ・アイリッシュおよびゲーリック・アイリッシュと呼ばれる人々について大まかな定義をすると、アングロ・アイリッシュとは、英国からアイルランドへ移住してきた人々、およびその子孫のことを指し、ゲーリック・アイリッシュとは、土着のケルト系の人々、およびその子孫とされる人々を指すということになる。このうちアングロ・アイリッシュに属する人々は、アイルランドへの移住の時期から見ると、チューダー王朝時代以前にアイルランドに侵入したオールド・イングリッシュと、チューダー王朝によるアイルランド完全征服以後に移住したニュー・イングリッシュに分けられる。

アイルランドが英国からの侵略を受け始めたのは、12世紀のことである。当時の英国を支配していたのは、まだ自分たちが英国人であるという意識を持つに至っていないノルマン人たちだった。英国を支配していたノルマン人（アングロ・ノルマン）たちは、アイルランド国内での王たちの争いに乗じてアイル

ランドを侵略する。この時代にアイルランドにやって来たアングロ・ノルマン貴族で最も有名なのは、ウェールズのペンブルーク伯リチャード・フィッツギルバード・ド・クレア、別名ストロングボウと呼ばれる武人であった。ストロングボウは、レンスター王のダーモット・マクモロの娘イーフェと結婚し、マクモロの死後、その後を継いでレンスター地方の王となる。(堀越 26)

この時代のノルマン人によるアイルランド征服は、イングランド征服と比較すると、部分的で不完全なものであった。英国からの移住者は、主にペイルと呼ばれる植民地に住み、アイルランドの人々とは交わらずに暮らしていた。ペイルの中では、英国的な暮らしが営まれたが、アイルランドにやって来たアングロ・ノルマンの中には、ペイルの外にある自分たちの領地に住んで、ストロングボウのようにゲール人と婚姻関係を結び、ゲール人たちの風習を取り入れて、本来のゲール人以上にゲール的になってしまう者も数多くいた(マーチン 145; コスグローヴ175)。また、次の引用にも見られるように、13-14世紀にはゲール人の文化の保護に深い理解を示し、自らその担い手となるアングロ・アイリッシュ貴族も現れる。

もし保護者がいなかったなら、当時の詩人や学者は生き残ることは困難だったことであろう。従ってかれらがまずこういう保護を求めてゲールの貴族を訪ねたのはすこぶる自然なことだった。しかし、アングロ・アイリッシュの貴族もまた13世紀という古い時代においてさえ、ゲールの文学者を保護していたことも明らかである。それだけでなく、かれらのある者はアイルランド語で詩作することに没頭し、しばしば専門家のそれと同じような技能を示した。1374年にジェンキン・サヴェッジが死んだ時、年代記作者は、「彼は孤児に詩を遺した」と記している。しかし、疑問の余地のない顕著な実例は第三代デズモンド伯であろう。かれは一時はアイルランドにおけるイギリス植民地の首領であったばかりでなく、自らアイルランド語で書いた詩の優秀さで名声を得た人物であった。かれこそは、多くの植民者が古めかしい決まり文句である「アイルランド人自身よりもアイルランド人的」になったといわれる文化的同化作用の完璧な実例である。ゲール人の母やイトコたちからかれらはアイルランド語をたちまち聞き覚えたため、かれらの多くにとってそれが最初の言語になったのである。そして、それからは里子のようにゲールの慣習を採用するまではほん

の一息だった。(ライドウン 166)

上に示されたようなアングロ・アイリッシュのゲール化を抑えるために、英国王エドワード3世は1367年にアングロ・アイリッシュとゲール人を隔離することを目的としたキルケニー法という法律を制定させる。キルケニー法の主な内容については、堀越智の『アイルランド民族運動の歴史』に挙げられているものを以下に引用しておく。

- 1 アイルランド人と結婚して、個人的な関係を持った者は大逆罪に処す。
- 2 アイルランド風の名前・服装・習慣・言語を使った者は、すべて土地・家屋を没収する。
- 3 ブレホン法^{#1}を認めた者は、大逆罪に処す。
- 4 アイルランド小作人に保有権を認めたり、アイルランド部族に王領地内での放牧を許す者は財産を没収する。
- 5 アイルランドの吟遊詩人や語り手を宿泊させたり、助けたりした者は、罰金を課す。
- 6 アイルランド僧侶に慈善事業や教会設立を許すことを禁止する。

(以下略)

(27-28)

しかし、この法律が実際に効力を発揮したのは、ダブリン周辺のごく限られた地域のみだった。14世紀末から16世紀までの英国は、百年戦争やバラ戦争のために、強力なアイルランド支配ができず、アイルランドは有力なアングロ・アイリッシュおよびゲール人の貴族たちによって支配されていると言ってよい状態だった。英国王リチャード2世が1394年にアイルランドを攻撃した時には、アングロ・アイリッシュの有力諸侯の中では最も英国的であったバトラー家のオーマンド伯でさえ、交渉の席で英国王とゲール人の族長たちとの通訳の役目を果たせた(コスグローヴ 186-187)ほどで、それくらいゲール人の文化は、アングロ・アイリッシュの間に浸透していたのである。

しかし、バラ戦争が終わった後、つまりチューダー王朝の時代以後、英国は

^{#1}ブレホン法(brehon law) ケルト人の慣習法。当時のゲール系アイルランド人の生活の基本であった。家父長制大家族によって構成される部族共同体による土地の共同所有を原則とし、部族会議で土地の割当や族長(部族の王)の選出、軍事などの重要な問題を決定した。イングランドの侵略によって次第に効力を失うが、ジェイムズ1世が17世紀に廃止するまで在続した。(堀越 19)

アイルランドへの干渉を強く行うようになる。バラ戦争さなかの1478年以来、アイルランド総督を勤めたキルデアのフィッツジェラルド家(キルデア伯爵家)は、1537年に断絶させられてしまい、これ以後、英国王の代理であるアイルランド総督には、ゲール文化の影響を受けたアイルランド生まれの貴族が任命されることはなくなる。また、キルデア伯爵家の滅亡以後は、ダブリンには英国の軍隊が駐留することになり、これは、1922年にアイルランド自由国が成立するまで続く(ヘイズーマッコイ 197-198)。

1541年にアイルランド国王にもなったヘンリー8世は、アイルランドを英国化する政策を推し進めていく。キルデアのフィッツジェラルド家が滅びた時代でも、イギリス人たちが「イギリス人反徒」とか「敵性アイルランド人」と呼ぶ有力な諸侯がまだ多く存在していた。表1および2に挙げられている諸侯たちと同じ名字を持つ人々は現在も数多くいるが、その人たちの中には、自らを非常に由緒正しい家系の血を引いた、紛れもないアイルランド人だと意識する人々がいる。実際、この時代の英国の支配に対して最後まで抵抗したのは、表に挙げたような名前を持つアングロ=アイリッシュとゲール人の貴族だった。

表1 英国にとっての「イギリス人反徒」 English rebels

(ゲール風的生活様式を多く採り入れたアングロ・アイリッシュ領主)

地方名	家名
マンスター Munster	フィッツジェラルド (FitzGerald of Desmond)、ロッシュ (Roche)、バリー (Barry)、パワー (Power)
レンスター Leinster	バトラー (Butler)、ディロン (Dillon)、ティレル (Tyrrell)
コナハト Connacht	バーク (Burke)
東部アルスター East Ulster	サヴィジ (Savage)

表2 英国にとっての「敵性アイルランド人」 Irish enemies
(ゲール人領主および首長：英国からは独立した存在)

地方名	家名
アルスター	オニール (O'Neill)、オドンネル (O'Donnell)、マグワイア (Maguire)、マクマホン (MacMahon)、オライリー (O'Reilly)
レンスター	カヴァナ (Kavanagh)、オバーン (O'Byrne)、オムーア (O'More)、オコンナー (O'Connors of Leinster)
マンスター	マッカーシー (MacCarthy)、オブライエン (O'Brien)、オサリヴァン (O'Sullivan)
コナハト	オコンナー (O'Connors of Connacht)、オケリー (O'Kelly)

(コズグローヴ 199 より作成)

しかし、この時代にはアングロ・アイリッシュとゲール人の間に同じアイルランド民族としての連帯意識がまだ薄く、英国のアイルランド侵略をくい止めるだけの力を結集することはできなかった。やがて、彼らの土地は没収され、新たにアイルランドにやって来た英国人（ニュー・イングリッシュ）やスコットランド人に与えられてしまう。特に、アルスター地方（かなりの部分が現在北アイルランドとなっている）では、プロテスタント系の英国人やプレスビテリアンのスコットランド人の入植が盛んに行われた（クラーク 213-217）。

一方、ヘンリー8世が1534年にローマ・カソリック教会と袂を分かったことは、アイルランドにとって不幸な時代の幕開けとなった。ヘンリーの娘であるエリザベス1世在世中の1560年には、ダブリンの議会でも the Act of Supremacy（国王至上法）および the Act of Uniformity（礼拝統一法）が可決され、アイルランドでも英国国教が強制される。また、1649年にはクロムウェルによる悪名高いアイルランド遠征が行われ、多数のカソリック教徒が虐殺されていく（堀越 30-36）。1692年にはウィリアム3世によりアイルランド議会からカソリック教徒が排除された（ウォール 243）。しかし、このようなカソリックに対する迫害にもかかわらず、ヘンリー8世やその後の英国王による宗教改革はペイル以外の土地ではあまり成功しなかった。当時アイルランドにあった教会は英国国教会の支配下に入ったり、破壊されたりしたが、アイルランドのカソリック教徒はそのほとんどが改宗することはなかったのである。現在のアイルランド共和国の人口の9割以上がカソリックという現状からも、宗教改革の不成功は明らかである。

しかしながらカソリック教徒への迫害は、次の世紀にはいると徐々に緩和されて、カソリック教徒の一部には英国のアイルランド支配を容認する傾向も現れる（ウォール 253-254）。その一方で、かつてオールド・イングリッシュがゲール人以上にゲール的になったように、新たに定住したニュー・イングリッシュの中には、自らを「アイルランド人」と自覚し、アイルランドの社会や経済に対して抑圧的な政策をとる英国に反感を持つ人々も現れる。やがて、18世紀末までには、「アングロ・アイリッシュのプロテスタント＝親英国」あるいは「カソリック教徒＝反英国」というような単純な図式では、政治的な立場の相違を説明できない事態が出来上がっていった。当時の親英国派と反英国派の内情がそれぞれどのようなものであったかは、次の引用中に簡単にではあるが説明されている。

Ireland had reached a state of vast, cataclysmic disorder. There was no clear-cut war between Irishmen and Englishmen, or Scots—of the regular troops in the country, less than a quarter were British—but a massive disturbance, involving those termed loyal Irish, that is, Irish men and women who supported the government, and the so-called disloyal Irish, most of whom had taken the oaths of the United Irishmen. In Ulster, loyal Irishmen were mostly Protestant, or Presbyterian Orangemen, or Anglo-Irish gentry, or their tenants; disloyal Irishmen numbered Protestants and Presbyterians among their leaders, but were otherwise mostly terrified Catholics. In the rest of Ireland, both sides were largely Catholic. (Somerset Fry, 202)

(訳) アイルランドは、どうしようもなく混乱し、大変動している状態になっていた。アイルランド人対イングランド人またはスコットランド人の争いと断定できるような争いなどなかった—国内の常備軍のうち、英国人部隊は4分の1もなかった—が、親英国派のアイルランド人とよばれる人々、つまり、英国政府を支持するアイルランド人と、ほとんどが「アイルランド人連盟 (ユナイテッド・アイリッシュメン)」^{#2}加盟の誓いを立てていた、いわゆる反英国派のアイルランド人たちを巻き

^{#2}カソリック解放とアイルランド議会の改革をめざして1791年に結成された政治組織。

こんだ大規模な騒乱が起こっていた。アルスター地方では、親英国派のアイランド人は、ほとんどがプロテスタントかプレスビテリアンのオレンジ黨員^{※3}、アングロ・アイリッシュの紳士階級、あるいは彼らから土地を借りている小作人であった。反英国派の指導者たちの中には、プロテスタントやプレスビテリアンが含まれていたが、それ以外は、ほとんどが脅えたカソリック教徒であった。アイランドの他の地方では、両派の大部分がカソリックだった。

上に挙げた引用文中の政治組織「ユナイテッド・アイリッシュメン」を組織したウルフ・トーン (Theobald Wolfe Tone, 1763-1798) は、18世紀末のアイランドの混乱期を象徴する人物と言えよう。彼は、プロテスタントでありながらカソリック救済を主張し、1793年のカソリック救済法の制定は彼の努力に負うところが大きいとされている (Hogan 662)。1798年のユナイテッド・アイリッシュメンの反乱を援助するためにフランスのアイランド遠征軍に同行したトーンは、フランス軍がイギリス艦隊に敗れた時に捕らえられ、死刑を宣告されるが、獄中で自殺した (マクドウェル 270, 273)。トーンの企ては、結果として、1800年の the Act of Union (連合国とアイランドの間の連合法) の制定を招き、アイランドは曲がりなりにも維持してきた独自の議会を失い、完全に英国に併合されることになる。しかし、彼のような人物の出現は、ゲール人の血統も持たなければ、カソリック教徒でもない人間でも「アイランド人」と名乗りうる時代がすでに始まっていたことを示していた。このようにして「アイランド人」という言葉が含有しうる意味は、「ゲール人」から「ゲール人とゲール化したオールド・イングリッシュ」あるいは「カソリック教徒」へ、さらには出自や宗派を問わず「アイランド生まれの人々」一般へと広がっていったのであった。

(3) イェイツ家の血統と宗教

さて、詩人のW. B. イェイツについてだが、アイランド人としての彼の出自はどのようなものだったのだろうか。

図1に示したように、イェイツの直系の祖先で、アイランドに最初にやって来たのは、詩人から6代さかのぼったジャーヴィス・イェイツという人物であ

^{※3}the Orange Society (オレンジ党) は、1795年にアイランドのプロテスタントにより組織された秘密結社である。

もバトラーである。しかし、バトラー家はオールド・イングリッシュの中でも最も英国的な家系であり、バトラーという名前は、もともと先祖の Theobald Walter が、プランタジネット家の王子の執事 (butler) を勤めたことにちなむもので、英国王室との主従関係を強く連想させる名前でもある。

しかしながら、詩人イエイツの自伝や伝記を読むと、彼が幼い頃からアイルランドに強い愛着を持ち、自らをアイルランド人と自覚していたことは否定できない。イエイツは1865年にダブリンで生まれ、1867年から1880年まではロンドンで暮らしたが、ロンドン在住の間も母親の実家があったアイルランド北西部のスライゴをしばしば訪れている。スライゴの美しい風景や、その地の妖精伝説に親しんだことが、アイルランドに対する愛着を育てていったのである。

また、英国系のプロテスタントでありながら、イエイツの祖先には、英国や英国人に対して反感を持ったり、アイルランドのカソリック教徒に対して同情的であったりする人々が多くいた。イエイツの祖先の一人であるベンジャミン・イエイツは当時のダブリン商業協会に所属していたが、この協会は英国系のプロテスタントの集まりでありながら、英国政府のアイルランド政策を批判したスウィフトを支持し、アイルランドに対する愛国心を表明していた (Hone 1)。また、イエイツの詩集 *Responsibilities* (1914) の冒頭に掲げられた導入詩を見てみよう。

*Pardon, old fathers, if you still remain
Somewhere in ear-shot for the story's end,
Old Dublin merchant 'free of the ten and four'
Or trading out of Galway into Spain;
Old country scholar, Robert Emmet's friend,
A hundred-year-old memory to the poor;
Merchant and scholar who have left me blood
That has not passed through any huckster's loin,
Soldiers that gave, whatever die was cast:
A Butler or an Armstrong that withstood
Beside the brackish waters of the Boyne
James and his Irish when the Dutchman crossed;
Old merchant skipper that leaped overboard
After a ragged hat in Biscay Bay;*

*You most of all, silent and fierce old man,
Because the daily spectacle that stirred
My fancy, and set my boyish lips to say,
'Only the wasteful virtues earn the sun';
Pardon that for a barren passion's sake,
Although I have come close on forty-nine,
I have no child, I have nothing but a book,
Nothing but that to prove your blood and mine.*

(Collected Poems 113)

(訳)

お許し下さい、祖先の方々よ、もし今でもどこか
物語の終わりが聞こえる所においでなら、
10パーセント税や4パーセント税を免除され
ゴールウェイからスペインへと貿易に行った昔のダブリンの貿易商よ、
ロバート・エメットの友であり、貧しい人々にとっては
百年の思い出となった昔の田舎の学者よ、
行商人の腰などは経ていない血を
私に伝えてくれた貿易商人や学者よ、
どんな骸(さい)が投げられようとも力を尽くした軍人たち、
ボイン川の塩辛い水の辺で、オランダ人^{#5}が川を渡った時に
ジェームズと彼の味方のアイルランド人たちに
立ち向かったバトラー家やアームストロング家の者よ、
ビスケー湾でぼろぼろの帽子を追って
船から海に飛び込んだ昔の商船の船長よ、
とりわけあなた、寡黙で猛々しい老人よ、
私の想像をかき立て、少年時代の私の唇に
「破壊的な美德だけが太陽を得るのだ」と言わせた
毎日の壮観な出来事のゆえに。
許して下さい、不毛な情熱のために
49歳近くなったのに
私に子がなく、本以外には何もないことを。

^{#5}英国王ウィリアム3世(オランダ出身)のこと。

それ以外には、あなた方と私の血統を証明するものが何もないことを。

この詩は、祖先から受け継いだ血を伝える子をまだ持てないと先祖に詫げる形をとっている。ここにあげられている先祖のうち、5行目で“*Old country scholar, Robert Emmet's friend*”と呼びかけられているのは、詩人の曾祖父にあたるジョン・イエイツである。牧師であったジョン・イエイツは、この詩にあるように、1803年にダブリンで英国に対する反乱を起こしたロバート・エメット (1778-1803) の友人であり、エメットの蜂起計画に荷担した疑いで数時間拘留された経験を持つ (Yeats, *Autobiographies* 21)。また、同じ詩の中で“*A hundred-year-old memory to the poor*”とあるように、近隣のカソリックの貧しい人々に対しても理解を示す牧師であった。この他、イエイツの父親ジョン・バトラー・イエイツは、政治には無関心な画家で穏健な考え方の人物だったが、芸術家でないイギリス人たちを冷淡にあしらう傾向があった。イエイツの母の実家であるポレックスフェン家の人々は王党派のプロテスタントで、カソリック教徒やアイルランド愛国主義者を軽蔑していたが、それにもかかわらず英国生まれの人々に対して反感を持つという矛盾した態度をとっていた (Hone 29)。イエイツの周辺のような反英国的な雰囲気も、彼の英国に対する反感やアイルランドに対する共感を育んだのであろう。

(4) ナショナリズムへの共感と幻滅

イエイツは、1885年にジョン・オリアリー (John O'Leary, 1830-1907) という人物と出会ったことがきっかけとなって、自分が愛国主義者、つまりナショナリストであるという自覚をはっきりと持つようになる。オリアリーは、1858年に米国のニューヨークとアイルランドのダブリンで同時に起こったフィニアン運動 (Fenian movement または Fenianism) と呼ばれるアイルランド独立運動の中心になった the Irish Republican Brotherhood (略称 IRB, アイルランド共和主義同盟) の指導者の一人であった。フィニアン運動を推進した活動家 (フィニアン) たちは急進的な独立運動を展開したが、そのほとんどがカソリックであった (ムーディ 311)。

しかし、フィニアンたちは、アイルランド人の民族意識がどうあるべきかについては、トーマス・デイヴィス (Thomas Davis, 1814-45) の考え方を全面的に容認していた (ムーディ 311)。デイヴィスはプロテスタント中産階級の出身だが、ダニエル・オコンネル (Daniel O'Connell, 1775-1847) のカソリック解放運動を支援するために1842年に創刊された週刊誌「ザ・ネイション」 (*The*

Nation) の主筆として活躍した。青年アイルランド党 (the Young Ireland) の幹部であったディヴィスは、アイルランドという国は、あくまでアイルランド的であることをめざすべきで、アングロ・アイリッシュ的であってはならないと考え、アイルランドから英国的な要素を排除することを主張した。その一方で、どんな祖先からでているとしても、つまりケルトであっても、ノルマンであっても、サクソンであっても、国を愛し、国に仕えるなら、みんなアイルランド人であるとも主張する (堀越 76-77)。彼は、アイルランド国内の多様な人々が、アイルランドの虐げられた歴史を認識し、互いに和解することでアイルランドが再び一つの国家になれると信じた (Foster 191)。このように、「アイルランド人」の定義をアイルランドに住むすべての人々を含めるところまで広げるといふ理念は、先に挙げたウルフ・トーンなどにも見られたが、これほど完璧に表現したのはディヴィスが最初であった (ホワイト 292-93)。ディヴィスの考え方は、フィニアン運動をはじめとする後のアイルランドの独立運動に大きな影響を与えていく。

ダブリンのトリニティ・カレッジに在籍する医学生であったオリアリーは、ディヴィスがネイション誌に掲載した詩とエッセイを読んで青年アイルランド党のメンバーとなり、やがてフィニアン運動を指導するようになる (Hone 51-52)。リチャード・エルマンによると、オリアリーは、1886年に2つの演説“*What Irishmen Should Know*”と“*How Irishmen Should Feel*”を行っているが、その後者では、アイルランド人たる者、まず自分がアイルランド人であると自覚すべきであり、アイルランド統一を確固たるものにするべく、アイルランドのために何らかの犠牲を払うべきであると主張している (Ellmann 47)。このオリアリーの主張は、ディヴィスの考え方に強く影響されていると言つてよいであろう。

20歳のイエイツと出会った時、オリアリーは、すでに55歳だったが、彼のアイルランド独立にかける情熱は衰えていなかった。当時パリでの長い追放生活から戻ったばかりのオリアリーは、アイルランドの民族精神を表現できる文学者を育てる必要を痛切に感じていた。イエイツの自伝によると、オリアリーは、ディヴィス書いた詩によってナショナリストとなったが、文学の素養がある人々を友人に持っており、ディヴィスをはじめとする愛国詩人が書いた作品の拙さも承知していた (Yeats, *Autobiographies* 209)。血統や宗派はアイルランド民族の条件にはならない、というディヴィスの理念に深く影響を受けていたオリアリーには、イエイツが血統的にはゲール人とは言いがたく、宗教的背景がアングリカンであることも気にならなかったようである。イエイツの才能と

彼のアイルランドに対する愛着を見抜いたオリアリーは、彼にディヴィスやその他の愛国者たちが作った詩を貸し与える。ディヴィスたちの詩は、文学作品としてはそれほど質の高いものではなかったが、彼らの作品に表現されたアイルランドへの思い入れに、イエイツは強く共感するものを覚える (Hone 51-53; McHugh & Harmon 125-26)。

オリアリーとの出会いによって、イエイツは自分が本当に書くべきである主題を見出していくことになる。彼は以前から興味を持っていたアイルランドの民話や伝説を深く研究し、1889年発表の詩集 *The Wanderings of Oisín and Other Poems* 以後、作品に積極的に取り入れていった。この詩集の中心となったのは、アイルランドの伝説「アシーンの放浪」を元にした長編詩で、イエイツは自分と同じくオリアリーの影響下にあった文学仲間キャサリン・タイナン (Katharine Tynan, 1859-1931) にアイルランド的主題を取り上げることを勧められて、この作品を手がけたのであった (Ellmann 48)。

しかし、後年イエイツはアイルランドのナショナリストたちに対して冷淡な態度を見せるようになる。英国の国会でアイルランドの自治を勝ち取るために活躍していたチャールズ・スチュワート・パーネル (Charles Stewart Parnell, 1846-91) の失脚が、ナショナリズムに対する幻滅のはじまりであったのかもしれない。パーネルは時の英国首相グラッドストーンも一目置くほどの政治家だったが、1890年に人妻との恋愛が公になって、カソリック教徒や非国教会系のプロテスタントの反発をかい、失脚に至る。その時のイエイツの幻滅は、下に掲げる1893年発表の詩に表現されている。

INTO THE TWILIGHT

Out-worn heart, in a time out-worn,
Come clear of the nets of wrong and right;
Laugh, heart, again in the grey twilight,
Sigh, heart, again in the dew of the morn.

Your mother Eire is always young,
Dew ever shining and twilight grey;
Though hope fall from you and love decay,
Burning in fires of a slanderous tongue.

Come, heart, where hill is heaped upon hill:

For there the mystical brotherhood
Of sun and moon and hollow and wood
And river and stream work out their will;

And God stands winding His lonely horn,
And time and the world are ever in flight;
And love is less kind than the grey twilight,
And hope is less dear than the dew of the morn.

(Collected Poems 65-66)

(訳)「黄昏の中へ」

疲れ切った時代の、疲れ切った心よ、
不正と正義の網から逃れて来い。
笑え、心よ、灰色の黄昏の中で今一度。
溜息をつけ、心よ、もういちど朝露の中で。

おまえの母なるエール^{#6}は常に若々しく、
露はいつも輝き、黄昏は灰色だ。
中傷の言葉という炎の中で焼かれて、
希望がおまえに背き、愛が崩れ去っても。

やって来い、心よ、丘に丘が連なるところへ。
そこでは太陽と月と窪地と森と川とせせらぎの
不思議な結びつきが、
自分たちの意志を実現しているから。

そして神はもの悲しく角笛を吹き鳴らしながら立っている。
そして時間と世界は常に飛び去っている。
そして愛は灰色の黄昏ほどに優しいものではなく、
そして希望は朝の露ほど愛しいものでもない。

アイルランドの自然の美しさを賛美することで打ち消そうとはしているが、こ

^{#6}アイルランドの別称。

の詩の根底には隠しようもない失意がある。この失意は1889年に出会った女性モード・ゴン (Maud Gonne, 1866-1953) に対する求婚が不首尾に終わったことによるものと解釈することもできるが、「中傷の言葉という炎の中で焼かれて」という部分には、むしろスキャンダルにまみれて失脚したパーネルの姿が投影されていると考える方が妥当ではないだろうか。

後年の作品では、イエイツのパーネル擁護はもっと明らかな形をとる。特に次にあげる1936年の作品には、パーネルへの共感とパーネルを失脚させたカソリック教会や政治家たちに対する批判がよく表現されている。

COME GATHER ROUND ME, PARNELLITES

Come gather round me, Parnellites,
 And praise our chosen man;
 Stand upright on your legs awhile,
 Stand upright while you can,
 For soon we lie where he is laid,
 And he is underground;
 Come fill up all those glasses
 And pass the bottle round.

And here's a cogent reason,
 And I have many more,
 He fought the might of England
 And saved the Irish poor,
 Whatever good a farmer's got
 He brought it all to pass;
 And here's another reason,
 That Parnell loved a lass.

And here's a final reason,
 He was of such a kind
 Every man that sings a song
 Keeps Parnell in his mind.
 For Parnell was a proud man,

No prouder trod the ground,
And a proud man's a lovely man,
So pass the bottle round.

The Bishops and the Party
That tragic story made,
A husband that had sold his wife
And after that betrayed;
But stories that live longest
Are sung above the glass,
And Parnell loved his country,
And Parnell loved his lass.

(*Collected Poems*, 355-356)

(訳) 「集まれ、パーネルの支持者たち」

集まれ、私の周りに、パーネルの支持者よ、
そして、神に選ばれた男を讃えよう。
しばらくの間、自分たちの足で真っ直ぐに立とう、
できる間は、真っ直ぐ立つんだ、
もうすぐ私たちは、彼が横たわる場所に行くのだから、
そして、彼がいるのは土の下。
ここに来て、杯になみなみと酒を注ぎ
酒を酌み交わそう。

そして、ほら、これが皆を納得させる理由だ、
もっといい理由をたくさん思いつくけれど。
彼は英国の権力と戦い、
アイルランドの貧しい者たちを救った。
何であれ農民が手に入れた利益は、
彼がうまいこと取り計らったものだ。
それから、別の理由がこれだ。
パーネルが一人の女を愛したということ。

そして、これが決定的な理由。
 パーネルは、歌を歌うあらゆる人間が、
 彼を心に留めている、
 というような種類の人だった。
 というのも、パーネルは誇り高い男だったから。
 あれほど誇り高い者が大地を踏んだことなどない。
 そして、誇り高い男は、敬愛すべき男。
 だから、酒を酌み交わそう。

司教たちと政党、
 妻を売り
 その後で裏切った夫^{#7}が
 あの悲劇を作り出した。
 しかし、何よりも生き長らえる物語は、
 酒の席で歌われるのだ。
 そして、パーネルは国を愛し、
 自分の恋人を愛した。

この作品によると、イエイツがパーネルに魅せられた理由には、彼の政治家としての業績の他に、彼が詩人たちの創作意欲をかきたてるようなカリスマ性を持っていたこともあるように思われる。パーネル失脚の原因となったキティ・オシアとの恋愛事件には寛大であるが、これは、イエイツ自身にも人妻との恋愛経験があったからであろう。^{#8}

愛国主義者たち、特にカソリック中産階級の人々に対するイエイツの嫌悪感を決定的なものにする事件が続けざまに起こったのは、主に1900年代から1910年代にかけてのことであった。まず、イエイツが経営に参加していたダブリン

^{#7}パーネルの愛人キティ・オシア(Kitty O'Shea)の夫ヘンリー・オシア大佐のこと。イエイツは、ヘンリー・オシアが離婚と引き替えに金を要求したという Henry Harrison の本、*Parnell Vindicated* を読んでいた。(Jeffares, *A New Commentary* 390)

^{#8}1896年、イエイツは、オリビア・シェイクスピア(Olivia Shakespear, 1867-1938)という女性と恋愛関係にあったが、彼女は、夫のある女性であった。この恋愛関係は、イエイツがモード・ゴンをあきらめきれなかったため、短期間で解消する。2人の間には、その後も友人としての関係が長く続いた。(大浦 92-129)

のアベイ劇場で、イエイツの後輩作家である J. M. シング (John Millington Synge, 1871-1909) の代表作 *The Playboy of the Western World* が1907年に上演された時に、この劇の内容に不快感を覚えた人々が劇場内で騒ぎを起こした事件を挙げるべきだろう。シングの劇は、アイルランド西部を舞台にした喜劇であったが、父親を殺したという若者にアイルランドの善良な田舎娘が好意を抱くという筋が、カソリックの人々の感情を逆撫でしたのである。シングの劇だけでなく、イエイツ自身がアベイ劇場で発表していた作品も高尚すぎて理解できないとの批判を受けており、アベイ劇場の経営に参加していた1904年から1910年にかけての間、イエイツは偏狭なカソリックの人々に対するいらだちを強く感じるようになっていった。1905年に夫と正式に別居したモード・ゴン^{※9}が、1906年10月20日にアベイ劇場に現れた時、観客が彼女に対して罵声を浴びせた事件に対しても、イエイツはいくつかの作品の中で怒りを顕にしている。同様に、ヒュー・レイン (Sir Hugh Lane, 1874-1915) ^{※10}がダブリンに絵を寄贈しようとした時、レインが美術館の設計に英国人を採用しようとしたことから、カソリックを中心としたアイルランドのナショナリストたちが彼を非難する事件が起きた際にも、イエイツはレインを擁護した。かつて1890年代には親しく交わったカソリックのナショナリストに対するイエイツの批判は、1913年作の“September, 1913”の第1連目で如実に語られているように、容赦のないものになっていく。

What need you, being come to sense,
But fumble in a greasy till
And add the halfpence to the pence
And prayer to shivering prayer, until
You have dried the marrow from the bone;

^{※9} イエイツに数回にわたって求婚されながら、これを断わり続けたモード・ゴンは、1903年にアイルランド独立運動の同志であったジョン・マックブライド (John MacBride, 1865-1916) と結婚する。彼女の結婚はイエイツに大変なショックを与えたが、この結婚は長続きしなかった。カソリックに改宗していたモードは、フランスの法廷で離婚訴訟を起こし、正式別居の許可を得た。(大浦 65-66, 68-70)

^{※10} ヒュー・レインは、画商および美術評論家として活躍した人物である。1901年以降、レインはイエイツの父親および弟の絵の取引や展覧会の企画などに関わった。(Hone 182) レインは詩に関心を持たなかったため、詩人は最初は彼に好感を持たなかったが、後の作品では彼に対する評価を変えている。レインは、グレゴリー夫人 (Lady Isabella Augusta Gregory, 1852-1932) の甥でもある。

For men were born to pray and save:
Romantic Ireland's dead and gone,
It's with O'Leary in the grave.

(*Collected Poems*, 120-121)

(訳)

正気に戻って、あなた方には何が必要なんだ。
脂で汚れた現金箱をまさぐって、
1ペンスに半ペンスを加えていったり、
おののく祈りに祈りを重ねていくより他に。
あなた方は骨の髄までひからびてしまった。
人間は祈って蓄えをするために生まれたのだからな。
ロマンティックなアイルランドは死んでなくなった。
オリアリーと一緒に墓の中。

オリアリーは1907年に亡くなっていたが、イエイツは彼の死とともにアイルランドの本当のナショナリズムも無くなってしまったと考えた。イエイツの目には、オリアリーの後に残ったナショナリストたちは、独立運動にかけた情熱を失って「正気に戻り」、芸術を理解せず物質的な富を意地汚く追い求め、狂信的で偏狭な考えに凝り固まっている人々に見えたのである。

(4) アングロ＝アイリッシュの伝統の偏重

しかしながら、イエイツがアイルランドの人々から「アイルランド的でない」と言われるのは、彼がパーネルを見殺しにしたアイルランドのカソリック教会やナショナリストたちを非難したことなどが直接の原因となっているとは思えない。たとえば、ジェームズ・ジョイスの *A Portrait of the Artist as a Young Man* の冒頭で、パーネルの評価をめぐる、家族の間で大喧嘩が起こってしまう場面 (Joyce 27-39) から、カソリックの中にもパーネルびいきの人々はいたことがわかる。また、イエイツの友人キャサリン・タイナンはカソリックでありながら、パーネルの失脚後も彼を熱烈に支持し、自分と同じカソリックの人々と対立した。どんなアングロ・アイリッシュよりも熱烈にパーネルを支持していると自認するタイナンには、イエイツなどは単なる傍観者としか見えなかったほどである (Tuohy 37)。さらに言えば、パーネルがアイルランド独立運動において重要な役割を果たした政治家であり、彼の失脚が独立運動の停滞

を招いた事実は否定しようがない。だから、イエイツがパーネルの失脚を嘆き、彼を見捨てた人々を非難したとしても、アベイ劇場で騒ぎを起こしてイエイツと対立したような偏狭な考えの人々ならともかく、現在のアイルランドの良識ある人々にとっては、それほどマイナスのイメージがあるとも思えない。

イエイツが、現在のアイルランドの人々一般から否定的な評価を受けるとすれば、その理由は、次の引用に見られるような、「プロテスタントのアングロ・アイリッシュが他のどんなアイルランド人よりも優れている」と言わんばかりの発言を繰り返したことにあるように思われる。

Protestant Ireland had immense prestige, Burke, Swift, Grattan, Emmet, Fitzgerald, Parnell, almost every name sung in modern song, had been Protestant ... (Yeats, *Autobiographies* 418)

(訳) プロテスタントのアイルランドは非常に信望を得ていたのだ。バーク¹¹、スウィフト、グラッタン¹²、エメット、フィッツジェラルド¹³、パーネル、現代の歌に歌われるほとんどすべての有名人は、プロテスタントだった。

上の引用は、保守党のソールズベリー卿内閣に対して断固とした態度をとれなかったプロテスタントのアングロ・アイリッシュ地主たちを批判している箇所からのもので、ここでのイエイツの意図は、パーネルやスウィフトなどのようにアイルランドのために力を尽くそうとしない地主たちを批判することであるが、しかし、このイエイツの言葉には、アイルランド国内で政治的な活動を指導してきたのはプロテスタントなのだという優越感も表されている。

次に引用する“Upon a House Shaken by the Land Agitation” (1910) になると、プロテスタント地主階級の人々が築き上げた「伝統」に対する「身びい

¹¹Edmund Burke(1729-1797)。アイルランド出身の政治哲学者。カソリック教徒の権利の保護を主張した。(Hogan 130-131)

¹²Henry Grattan(1746-1820)。アイルランドの政治家。1782年から1800年にアイルランド国会が消滅するまで国会議員として活躍し、議会内部で英国のアイルランド支配に抵抗する勢力を指導した。(Hogan 268)

¹³Lord Edward Fitzgerald(1763-98)。経験豊かな軍人であったが、ユナイテッド・アイリッシュメンに加わり、1798年の反乱を計画した。反乱の実行直前に逮捕され、その時の怪我がもとで死亡した。(堀越 63)

き」は、さらにはっきりと表現されている。

How should the world be luckier if this house,
 Where passion and precision have been one
 Time out of mind, became too ruinous
 To breed the lidless eye that loves the sun?
 And the sweet laughing eagle thoughts that grow
 Where wings have memory of wings, and all
 That comes of the best knit to the best? Although
 Mean roof-trees were the sturdier for its fall,
 How should their luck run high enough to reach
 The gifts that govern men, and after these
 To gradual Time's last gift, a written speech
 Wrought of high laughter, loveliness and ease?

(*Collected Poems* 106-107)

(訳)

この世がさらなる繁栄に恵まれることなどあるのだろうか。
 忘れ去られた時代には、情熱と緻密さが一体となっていたこの家¹⁴が、
 あまりに荒れはてて、太陽を愛する瞼のない目¹⁵を
 生み出すことができなくなるとしたら。
 そして、翼が翼を使うことを記憶している場所で育つ
 甘美な笑いさざめく鷲の想像力や、最高の結びつきから生まれて
 最高の結びつきへと至るすべてのものを生み出せなくなるなら。
 その家の没落にかわって、貧しい家がますます力を得たけれども、
 そんな家が富み栄えることなどあるのだろうか。
 人々を治める才能¹⁶にたどり着くほどに。

¹⁴ クール・パーク(Coole Park)のこと。1942年に取り壊された。(Jeffares, *A New Commentary* 93)

¹⁵ 鷲の目のこと。鷲はまばたきせずに太陽に見つめることができると信じられていた。(Jeffares, *A New Commentary* 93)

¹⁶ グレゴリー夫人の夫、Sir William Gregory (1817-92)を指している。政治家でセイロン総督を勤めた。(Jeffares, *A New Commentary* 94)

¹⁷ グレゴリー夫人作の戯曲とアイルランド伝説についての2冊の本を指す。(Jeffares, *A New Commentary* 94)

また、その後が続いた、ゆるやかに過ぎる時の最後の賜物として
 高らかな笑い声、愛らしき、安らぎから作られ、
 文字となった言葉^{#17}へとたどり着くほどに。

この作品はイエイツにとっては恩人でもあり、アイルランド文芸復興運動の同志でもあるオーガスタ・グレゴリー夫人の屋敷、クール・パークを主題にしている。アイルランドに小作農民の利益を優先する新しい土地法が施行されて以来、グレゴリー夫人が地主として得ていた収入が激減し、広大なクール・パークの維持が困難になっていることを憂慮して書かれたものである。イエイツは、1882年にはじめてクール・パークを訪れているが、次の年からは毎年夏をこの屋敷で過ごすようになった（大浦 137-138）。イエイツ以外にも、クール・パークを訪れる文人や政治家、芸術家は数多くいた。イエイツにとって、この地は安らぎの場所であると同時に、アングロ・アイリッシュの優れた人材が集まり、アイルランドを担う文化を生み出し、受け継いでいった聖地であった。この詩には、クール・パークに対するイエイツの敬愛の念がよく表されている。

その一方で、この詩は貧しいアイルランドの人々に対する彼の無関心さも浮き彫りにしている。貧しい人々の生活が豊かなものになることよりも、これまでアングロ・アイリッシュの伝統を受け継いできたクール・パークの方が、イエイツには重要だったのである。しかも、貧しい暮らしに耐えてきた人々が豊かになったところで、地主であるグレゴリー家の人たちと同じ資質を持つことはできないだろうとイエイツは結んでいる。イエイツのクール・パークに対する思い入れを考慮に入れたとしても、この詩の内容に反発を覚える人は多いのではないだろうか。特に、貧しい生活を強いられてきた人々や彼らに同情的な人々が読んだとしたなら、かなり不快な思いをするであろう。

もともと、イエイツの政治や社会についての認識は、かなり偏ったものであった。彼は、詩人としては疑いもなく第一級の実力者であったが、自分でも認めているように、政治や社会について広い視野を持っていたわけではなかった。彼が書く詩に政治的な事件が取り上げられても、それは主にアイルランド国内の、しかも彼自身か彼の身近な人々に関係する事柄に限られていた。晩年の詩“Politics”（1939年発表）は、彼にとって政治が本来の興味の対象ではなかったことをよく表している。

How can I, that girl standing there,
 My attention fix

On Roman or on Russian
 Or on Spanish politics?
 Yet here's a travelled man that knows
 What he talks about,
 And there's a politician
 That has read and thought,
 And maybe what they say is true
 Of war and war's alarms,
 But O that I were young again
 And held her in my arms!

(*Collected Poems* 392-393)

(訳)

あの娘がそこに立っているというのに、
 どうして私の関心を
 ローマやロシアや
 スペインの政治に向けていられようか。
 だが、ここには自分が何を話しているかを
 わきまえている旅行者がいるし、
 あちらには、ものを読んだり
 考えたりしてきた政治家もいるし、
 たぶん、戦争や戦争の心配について
 あの人たちが言うことは本当なのだろう。
 それにしても、ああ、私が若返って
 あの娘をこの腕に抱けるならなあ！

また、彼の政治的発言は、個人的な好悪の感情に大きく左右されることが多かった。ナショナリストたちと疎遠になっていった理由には、親しかった人々が彼らから非難を浴びたこと、彼自身が批判されたことが含まれていた。反対に、自分自身と直接の関係がない人々については、彼はほとんど関心をよせていない。たとえば、イエイツは、スライゴーなどで知ったアイルランドの農民の素朴さを愛していたが、本当に彼らの立場に立った作品を書くことはできなかった。アイルランドの農民の多くが、まるで昨日の出来事のように身近な事件として語る1845年の Potato Famine (ジャガイモ飢饉) のことを主題にした作品をイエイツはほとんど書いていない。かろうじて彼の劇 *The Countess Cathleen* (1892) が、飢饉に苦しむアイルランドを舞台にしているが、劇の主題

は飢饉に苦しむ農民たちよりも、むしろ彼らを救おうと悪魔と取り引きするカスリーン伯爵夫人の魂の行方である。この劇はイエイツがモード・ゴンのために書いたもので、主人公のカスリーン伯爵夫人には、当時アイルランドのドネガルで飢饉に苦しむ農民たちの救済事業のために心を砕き、健康を害していた彼女の姿が投影されていたと考えられる。^{#18}意地悪な見方をすれば、イエイツにとっては飢餓に苦しむ農民たちの運命よりも、愛する女性の健康の方が気がかりだったと言えるのである。

“Upon a House Shaken by the Land Agitation”についてつけ加えると、彼がクール・パークの没落を嘆くことは、実はパーネル支持を明言する彼の政治的立場との間で大きな矛盾を含んでいた。先に引用した“Come Gather round Me, Parnellites”でも言及されていたが、土地改革を推進し、アイルランドの貧しい小作農を救済しようとしたのは、パーネルであった。自身は地主でありながら、土地改革を進めたことが、タイナンのように熱心なパーネル支持者をカソリック教徒の間にも生んだのである。地主の土地占有を解消する土地改革の前には、グレゴリー家もかつての財産や栄光を手放さなければならないという現実を、イエイツはまっすぐに受けとめることができなかった。タイナンのように、パーネル支持者としてのイエイツに煮えきらない、矛盾した態度を見る人は多いであろう。そして、クール・パークの荒廃を嘆くこの詩では、イエイツは、英国の压制下で苦しんできたアイルランドというよりは、英国の支配下で莫大な財産を築き上げた地主階級の代弁者のように振る舞っている。

たしかに、イエイツのアングロ・アイリッシュ地主擁護は、クール・パークとグレゴリー家に限られており、アイルランドの大義のためになんら犠牲を払おうとしない地主たちのことは、彼も批判していた。クール・パークが彼にとって聖地であったのは、その所有者であるグレゴリー夫人がイエイツとともにアイルランド文芸復興に尽くしたという事実があったからなのである。しかし、自分自身や、自分と親しい人々をカソリック系のナショナリストが攻撃するようになった時、イエイツは自分とカソリック系のナショナリストとの間に一線を引くために、自分がアングロ・アイリッシュ・プロテスタントの血を引く者であるという事実を持ち出した。そして、イギリスに抵抗してきたアイルラン

^{#18}1939年発表の詩“The Circus Animal’s Desertion”で、この劇を書いていた頃、モードが彼女自身の魂を滅ぼしてしまうのではないかと恐れていたとイエイツは告白している。

ド独立運動の指導者にはアングロ・アイリッシュが多くいたことを指摘し、自らの立場を擁護しようとした。

しかし、自分がアングロ・アイリッシュであることを主張することは、イエイツにとっては諸刃の剣であった。アングロ・アイリッシュ・プロテスタントであることを明らかにして、偏狭なカソリック系の人々との立場の相違を主張することはできたであろう。しかし、彼らとの差異を明らかにするために血統や宗教の違いを持ち出したことは、イエイツの誤りであった。今更そんな話を持ち出すことは、血統、宗教、階級の違いを越えてアイルランドの人々を一つの国民としてまとめあげようとするディヴィス以来の努力に逆行するものだったからである。ウルフ・トーン時代以後、「アングロ・アイリッシュのプロテスタント＝親英国」あるいは「カソリック教徒＝反英国」というような図式が、当てはまらなくなったことは先にも述べたが、一方ではプロテスタントとカソリックの間の対立が全くなくなったわけではなかった。むしろそれは解決されることなく、アイルランドの人々の心の中にわだかまり、ディヴィスの理想の実現を困難なものにしていた。この宗教上の対立の罫にイエイツもはまりこんでしまった。イエイツがさして信仰の厚い人でなかったことを考えると、皮肉な顛末である。そして、アングロ・アイリッシュの地主たちが没落し、数の上で圧倒的に多いカソリックの人々がアイルランドという国を動かす時代になって、アングロ・アイリッシュだけがアイルランドの文化の担い手とは言えなくなった時、アングロ・アイリッシュの優越性を主張したイエイツの声は、過去の時代を懐かしむだけのものとなってしまった。そして、彼が懐かしんだ時代は、ほとんどのアイルランドの人々にとっては、後戻りしたくない不幸な時代だったのである。

* この論文は、日本比較文化学会関西支部月例会（1994年7月23日 於：同志社大学）での研究発表原稿『アイルランド人になりたかったイエイツ』に、加筆訂正を行ったものである。

[参考文献（邦文）]

- 今井 宏編『世界歴史大系・イギリス史2－近世』山川出版社 1990年
 ウォール、モーリン『刑罰法時代』（T・W・ムーディ/F・X・マーチン編著『アイルランドの風土と歴史』論創社 1987年 243-258頁）
 大浦 幸男『イエイツをめぐる女性たち』山口書店 1987年
 クラーク、エイダン『アルスターの植民地化と一六四一年の蜂起』（『アイルラ

- ンドの風土と歴史』 213-228頁)
 コスグローヴ、アート『ゲール勢力の復活とジェラルディーン一族の覇権』
 (『アイルランドの風土と歴史』 171-194頁)
 ヘイズ-マッコイ、G・A『チューダー朝の征服』(『アイルランドの風土と歴史』
 195-212頁)
 堀越 智『アイルランド民族運動の歴史』三省堂 1987年
 ホホワイト、J・H『ダニエル・オコンネルの時代』(『アイルランドの風土と歴史』
 276-295頁)
 マクドウェル、R・B『プロテスタント国家』(『アイルランドの風土と歴史』259
 -275頁)
 マーチン、F・X『アングロ・ノルマンの侵入』(『アイルランドの風土と歴史』
 123-151頁)
 ムーディ、T・W『フィニアン、自治、土地戦争』(『アイルランドの風土と歴史』
 307-327頁)
 ライドゥン、J・F『中世のイギリス植民地』(『アイルランドの風土と歴史』152
 -170頁)

[参考文献 (英文)]

- Cross, F. L. ed. *Oxford Dictionary of the Christian Church*. 1st ed. 1957. 2nd ed. 1974. Oxford, 1978.
 Ellmann, Richard. *Yeats: The Man and the Masks*. 1st ed. 1979. Penguin, 1988.
 Foster, R. F. "Ascendancy and Union." Foster, R. F. ed. *The Oxford Illustrated History of Ireland*. Oxford, 1989. 161-211.
 Hogan, Robert ed. *Dictionary of Irish Literature*. Greenwood Press, 1979.
 Hone, Joseph. *W.B. Yeats 1865-1939*. 1st ed. 1943. 2nd ed. 1962. Macmillan, 1989.
 Jeffares, A. Norman. *A New Commentary on the Poems of W. B. Yeats*. 1st ed. 1968. Macmillan, 1984.
 ————. *W. B. Yeats: A New Biography*. Hutchinson, 1988.
 Joyce, James. *A Portrait of the Artist as a Young Man*. 1st ed. 1916. Penguin, 1982.
 McHugh, Roger & Harmon, Maurice. *Short History of Anglo-Irish Literature: From Its Origins to the Present Day*. Wolfhound Press, 1982.

Somerset Fry, Peter & Fiona. *A History of Ireland*. 1st. ed. 1988. Routledge, 1991.

Tuohy, Frank. *Yeats: An Illustrated Biography*. 1st ed. 1976. Herbert Press, 1991.

Yeats, W. B. *Autobiographies*. 1st ed. 1955. Macmillan, 1980.

———. *Collected Poems*. 1st ed. 1933. 2nd ed. 1950. Macmillan, 1978.